

ヒットし、香港生まれの成龍がカンフー映画の新しいスターとなる。“喜劇片”(コメディ映画)の要素を多用した娯楽作品は、わが国においても80年代からブームを呼び、95年『紅番区』(レッド・ブロンクス)などにより、アメリカにおける本格的な進出に成功した。2000年『龍旋風』(シャンハイ・ヌーン)のヒットは記憶に新しい。

また80~90年代にかけ、“香港新浪潮電影”(香港ニューウェーブ)の中心的な存在となった徐克(シュー・カー; ツイ・ハーク)監督や呉宇森(ウー・ユイーセン; ジョン・ウー)監督が台頭し、犯罪・アクション・刑事ものの映画の中でカンフー映画の手法が多用された。



映画『龍旋風』の看板(2000、上海)

『英雄』

中国大陸における本格的なカンフー・武俠映画制作の再開は90年『双旗鎮刀客』(そうきちんとうきやく)であり、“西部片”(西部劇)、“面条西部片”(マカロニウエスタン)や黒澤明の影響を受けた映画作りが話題を呼んだ。制作は“第五代導演”(第五世代監督)に属する何平(ハー・ピン)監督によっておこなわれた。

94年には、香港で最も売れっ子となった王家衛(ワン・ジアウェイ; ウォン・カーウアイ)監督によって、『東邪西毒』(楽園の瑕)が制作された。2002年4月1日に自らの命を絶った香港のトップスター張国榮(ジャン・グオロン; レスリー・チャン)と梁家輝(リャン・ジアフイ; レオン・カーファイ)が侠客を演じた。

2002年12月に中国において公開が開始された

『英雄』(HERO)は、2003年のアカデミー外国作品賞にノミネートされ、わが国においても2003年の夏からロードショー公開が続いている。第五世代である張芸謀監督の初のカンフー・武俠映画の娯楽大作であり、香港の人気スターの李連傑(リ・リエンジエ; ジェット・リー)、梁朝偉(リャン・チャオウェイ; トニー・レオン)、張曼玉(ジャン・マンユイ; マギー・チャン)、中国大陸の章子怡(ジャン・ズイー)が剣客として登場した。また陳道明(チェン・ダオミン)の始皇帝役も見逃せない。『HERO』は中国の“歴史片”(歴史ものの映画)、“愛情片”(恋愛映画)に香港の“武俠片”(武俠映画)“功夫片”(カンフー映画)の要素をとり入れた娯楽大作であるといえる。

これらの作品はビデオ・VCD・DVDで市販されているので、是非観賞をすすめたい。なお中国映画をもっと知りたい人は、愛知大学現代中国学部編『ハンドブック 現代中国』あるむ・2003年、愛知大学現代中国学会編『中国21 Vol.11 現代中国映画研究』風媒社・2001年の2冊を参照してください。

イングランドにおける語学 教育の動向 「21世紀国家戦略」

法学部
平尾 節子

イギリスの首相 Tony Blair は国の政策の第1優先事項として「教育」、第2第3の重要事項も「教育」、「教育」を挙げている。1999年 Oxford 大学 Sheldonian Theatre の年次講演において「21世紀の教育と人的資本」というタイトルで、

次のように声明した。

英語は、新しい時代のリング・フランカである。これはイギリス国民にとって有利なことである。特に、教育の上で大きな利点となる。しかし、その利点は我々1人ひとりが新しいヨーロッパ、そして、より広い世界に踏み出していく能力如何にかかっている。言語学習は、早く始めれば早いほど、容易であることは、だれでも知っている。イギリスで、現在、外国語が、中等学校から必修となっているのはよいことである。しかし、もっと早く始めれば、優位なスタートがきれる。すでにいくつかの小学校では、この早期学習に関して優れた実績をあげている。どの学校も、読み・書き、・計算の基礎学力を重視する傾向があるが、公立小学校における、外国語教育の導入の重要性を真剣に考えているところである。

EU(ヨーロッパ連合)においては“The European Year of Languages 2001”の提唱以来「1+2」の言語政策のもと、小学校から外国語教育が導入されている。すなわち「母語」を習得し「外国語を2ヶ国語」以上学習する。「多様な言語はヨーロッパの文化遺産である」という理念のもと、EUは多言語・多文化・多民族の共存と発展を目指している。EUの2000年度統計によれば、EUの小学校の90.5%が外国語を学習している。また、ヨーロッパの小学生3人中2人は、すでに英語を学んでいる。EU加盟国15ヶ国中、公立小学校で外国語学習が必修になっていないのは、イギリスだけである。

実際に、今年8月15日付、イギリスの最大新聞タイムズ紙に、学生の外国語離れが報じられた。大学進学に必要とされるGCE・Aレベル試験において、フランス語、ドイツ語の選択率が過去7年間で、それぞれ23%、16%下降している。代わって、コンピュータや、ICT (Information Communication Technology) を選択する傾向がある。この明確な事実をふまえて、イギリスは、

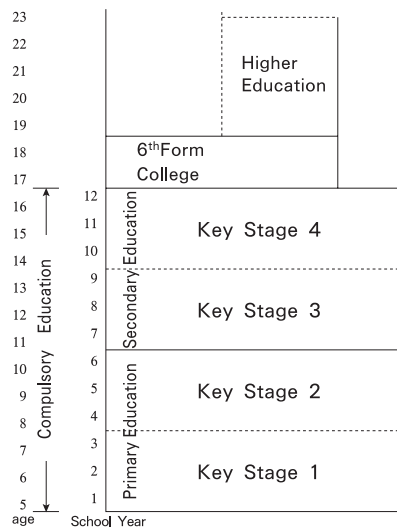
従来の「英語・単一言語主義」とも言える施策の継続は、もはやできない事態となっていることは、ブレア首相の講演からも明らかである。

2002年12月、教育改革の政府プランが打ち出された。今後10年間の展望のもとに、外国語教育改革の達成をめざしていく国家戦略である。

筆者は、2003年3月パース大学で開催されたAAL (Association of All Languages) 学会で、最新の動向に関する講演を聞く機会に恵まれた。早期外国語教育のパイロット・スクールも訪問し、関係の参考資料を得ることができた。イギリスにおける外国語 (Modern Foreign Languages 現代外国語) 教育が、現在、大きく変貌しつつあることを実感した。

イングランドの学校教育制度

イギリスは、イングランド、ウエールズ、スコットランド、(以上3地域をグレート・ブリテンと言う) および北アイルランドの4地域からなる。総称してUK (United Kingdom) と称する。前2者はほぼ同様の教育制度であるが、後の2地域はやや異なっている。本稿では、イギリスの全人口の約90%を占めるイングランド・ウエールズの学校教育制度を中心として述べる。以下、イングランドと記述する。



イングランドにおける教育改革の経緯

「1994年の改革教育法」

* 初等教育から中等教育へ進学する年齢は、11歳とされた。いわゆる“11-plus-examination”と呼ばれる「11歳テスト」を行い、成績順位によって3タイプの中高等学校に振り分けた。

- 1) グラマー・スクール (大学への進学を目指す者のための7年制の中高等学校)、
- 2) テクニカル・スクール (特に技術系の教科に重点を置いた7年制の学校)、
- 3) モダン・スクール (グラマー・スクールに進学しない生徒の学校で5年制)

結果、約20%の児童がグラマー・スクールへ、約75%は、テクニカル・スクール、またはモダン・スクールへ進学した。11歳の時点で、能力別選別により、子どもの将来がほぼ決定されてしまう制度に批判が生じ、労働党政権となった1965年以降、11-plus-exam は廃止され、無試験で受け入れるコンプレヘンシブ・スクール (総合制中高等学校) が、全国的に導入された。

「1988教育改革法」

サッチャー首相の英断により、イングランドとウェールズの教育制度が劇的変革を遂げた。

- * 5歳から16歳の義務教育において、全国共通カリキュラムを導入。
- * 7歳、11歳、14歳、16歳の時点で、その学習到達度を図る国家統一テストを導入。
- * 学習到達目標を、英語、数学、科学の“Core-subjects”「中核教科」で設定。



マーガレット・サッチャー首相・記念国際会議場

学習到達目標

全国共通カリキュラムの教科の内容は、教育大

臣が省令によって定め、学習計画、および学習の到達目標が、英語 (国語)、数学、科学の3教科、いわゆる‘core-subjects’「中核教科」に対して設定される。これらの‘core-subjects’に、技術、歴史、地理、芸術、音楽、体育を加え、‘foundation subjects’:「基礎教科」とし必修である。中高等学校においては、現代外国語が1ヶ国語必修である。

到達度評価

「1998年教育改革法」では全国共通カリキュラムの導入と併せて、生徒の到達度評価を実施することとされている。すなわち、小学校の、7歳時、11歳時、14歳時に、全国統一試験を受け、到達度を評価される。

中等教育における国家統一の資格試験

GCSE (General Certificate of Secondary Education): 「中等教育修了証」は、Key Stage 4 (16歳) で受験する国家共通資格試験である。GCSE 試験は、義務教育の最終段階における試験で、生徒は多数の試験科目の中から将来の進路などに応じて、通常5科目以上を選んで受験する。その評価は、科目ごとに最高 A から最低 G までの7段階で示され、G に達しない者は、不合格とされる。

GCE (General Certificate of Education) Advanced Level (A-level): 「教育修了一般資格」上級 (GCE・Aレベル) 試験は、中等教育の最終段階において、主として、大学進学希望者が受験する。その評価は、A~E, N, U の順に7段階で行われ、A~E が合格となっている。大学入学にあたっては、一般に3科目において、A~C の成績が要求される。GCE・AS (Advanced Supplementary) = 準上級レベル試験が1989年から実施されている。AS レベルは、Aレベルの半分の履修時間で学習できる内容で、大学への入学選抜にあたっては、AS レベル2科目が、Aレベル1科目に相当する。

GCSE および GCE は、受験した科目についての成績証明書の性格をもち、大学進学や、就職に

あたって重要な資格の一つである。日本と大きく異なって、イギリスでは、学校卒業時に卒業証書を授与するという制度になっていない。GCSE および GCE 試験に合格しなければ、学校を出ても、何の資格も得られないのである。GCSE および GCE 試験の結果は、'League Tables' 「リーグ・テーブル」と呼ばれ、全国一斉に公表され、全国主要新聞にも大々的に報道される。

2003年度 GCSE および GCE・Aレベルの結果
インデペンデント紙は、「GCSE 合格率10年間で最低」という見出しを掲げ、次のように記した。

60万人の受験者中、17万人を超える不合格者が出た。特に、フランス語、ドイツ語における不合格者は、昨年より倍以上にのぼる。昨年は、3万人であったが、今年は、6万人もの若者が11年間の学校教育に対して何の資格も得ずに、学校を去ることになる。

政府は、小学校における外国語教育の推進を図り、10年後までには、全ての7歳の児童に、外国語を1カ国語を学習させる。教育省は、「本格的に改革を進める」との声明を出した。

「イングランドの外国語教育・国家戦略2003」とは
イングランドにおける外国語の運用能力を向上させるために、学校教育およびその後の語学学習の多様な機会を広げ、より充実させる国家プランである。MFL (現代外国語教育) についての政府のビジョンが次のように述べられている。



オックスフォード大学・サマヴィル・カレッジ

今日グローバルな社会で英語以外の言語を理解し、コミュニケーションをする能力は極めて重要である。多様な言語は、社会の文化的言語的豊かさをもたらし、人間性の涵養、相互理解、経済上の成功、国際貿易、地球市民へ貢献する。

- * 早期言語教育の機会を提供し、子どもたちの学習に対する可能性と熱意を促進する
- * 質の高い教育と学習の機会を提供し、職業上および旅行等で必要とされる技能を養成する
- * 生涯学習の機会を提供する
- * 言語運用技能は、国内、他の国家間との障壁を取り除く中心的役割を果たすものと認識する
- * イングランドの言語運用能力を向上させ、国際的信頼を獲得する

'Languages for All: Language for Life' の目的

- * あらゆる言語を、すべての人、あらゆる年齢層対象に語学教育・語学学習を推進する
- * 小学校の Key Stage 2 (7歳) からの早期外国語学習を積極的に導入する
- * GCE, GCSE などの資格試験制度の中に MFL の位置付けを確実にする
- * 到達度評価を "National Language Standards" および "European Common Language Framework" (ヨーロッパ共通言語基準) のレベルとリンクさせる
- * 語学学習人口を増やす

イングランドの早期外国語教育：

小学校における MFL (Modern Foreign Language) 現代外国語教育「イングランドの外国語教育・国家戦略」は次の事項を10年後までに達成すると表明している。

- * 小学校の Key Stage 2 (7歳 - 11歳) で、外国語を少なくとも1カ国語履修する
- * 外国の文化に対する興味・関心を高める
- * ネイティブ・スピーカーの教員や e-learning などを活用できる質の高い学習の機会をもつ
- * 11歳までに、The Common European

Framework (ヨーロッパ言語共通基準) に示されている運用能力の基準レベルに到達する

* イングランドのナショナル基準レベルの能力を培う

* ICT (Information Communication Technology) を有効に活用する

早期外国語教育の先導的パイロット・プロジェクト

1999年 から2003年、早期外国語教育のパイロット・プロジェクトが、政府機関、および地方教育当局が参加し、“Good Practice” の実践模範校の開発および普及を図っている。

ロンドン、リバープール、バーミンガム、ノッティンガム、ランカスター、パース、ヨーク、シェフィールド、リトン各市、ケント、ヨークシャー州などでは、7才からの外国語教育の実践校の活躍がめざましい。



Train up a Child in the way he should go.
(オックスフォード大学図書館)



シェフィールドの小学校の外国語授業風景

イングランドにおける最近の動向

「外国語教育・国家戦略」推進のため、年間1,000万ポンド(約20億円)の予算措置がされた。また、EUを視野に入れた外国語教育のため、下記のEU教育プログラムへの積極的参加がある。

- 1) 「ソクラテス」(Socrates) : 総合的教育計画
- 2) 「コメニウス」(Comenius) : 初等・中等教育計画
- 3) 「リンガ」(Lingua) : 外国語教育計画
- 4) 「エラスムス」(Erasmus) 大学生・教員・研究者のEU 15カ国加盟国間の相互交流推進計画
「エラスムス」計画では単位互換制、および登録料免除のシステムのもと、2010年には参加者300万人を目標としている。

「イングランド国家戦略」と「『英語が話せる日本人』育成のための戦略構想」

イングランド「外国語教育改革・国家戦略」は、“Languages for All : Languages for Life” の理念のもとに21世紀における地球市民として多言語運用能力と異文化理解が、必要不可欠であることを強調し、小学校 Key Stage 2 (7歳) から、大学教育、生涯学習に至までの外国語教育の推進を図ろうとしている。EU加盟国15カ国は、小学校から必修科目として外国語教育を実施している。

日本では、2002年、小学校「総合的学習」の時間に、国際理解教育の一環として英会話活動が導入されたが、イギリスやEU諸国のように、教科

としての外国語教育にはなっていない。

2002年7月「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」が文部科学省から公表された。国際社会に活躍する人材の育成を目標としているが、外国語教育が「英語」主導であり、外国語教育の理念、内容が乏しい。また、英語教員養成施策として、現職教育の長期海外研修が全国で年間28名では、不十分と考えざるを得ない。

愛知大学研究助成を受けてイングランドにおける調査研究を行ったものである。

ジョージ・オーウェルの紅茶道

経営学部
安藤 聡

紅茶を飲むときに、ティーカップに紅茶を注いでからミルクを加えるべきか、あるいはミルクをティーカップに入れておいてからその上に紅茶を注ぐべきか。これは長年にわたって英国で議論され続けてきた（この部分を英語で言えば時制は現在完了）重大な問題である。先日その論争について一応の終止符が打たれたようだ。王立化学協会の発表では、ミルクを先に入れておくことが「科学的に正しい」方法とのことである。これはジョージ・オーウェルの紅茶道に反することなのだが。いずれにせよ「ミルク後派」もこれから反論を試みるであろうから、論争はまだまだ続くであろう。だから現在完了なのである。

ジョージ・オーウェル（1903～50）は20世紀の

英文学を代表する作家のひとりである。本名をエリック・アーサー・ブレアというが、一説によるとイングランドを自分の故郷と認識し、ブレアというスコットランド的な姓を嫌ってジョージ・オーウェルというきわめてイングランド的な筆名を使ったという。小説家としては政治的寓話『動物農場』*Animal Farm*（1945）や近未来小説『1984年』*Nineteen Eighty-four*（1949）、ジャーナリストとしては『パリ、ロンドンどん底生活』*Down and Out in Paris and London*（1933）、『ウィガン波止場への道』*The Road to Wigan Pier*（1937）、あるいは『カタロニア賛歌』*Homage to Catalonia*（1938）などを著し、またエッセイスト、コラムニストとしても活躍した。有名なオーウェルの紅茶論は1946年1月12日に夕刊紙『イブニング・スタンダード』に掲載されたコラム「一杯の美味なる紅茶」‘A Nice Cup of Tea’に詳しく述べられている。今回の王立化学協会の発表も、オーウェルの生誕100周年を記念して行なわれたものであった。

オーウェルの紅茶道には「黄金の掟」と称される11箇条がある。原文を引用しながらこれらの黄金の掟を検討しよう。

(1) First of all, one should use Indian or Ceylonese tea.

茶葉の産地はインドかセイロン（現在のスリランカ）に限るのだそうだ。この箇条でオーウェルは、「中国茶にも... 多くの美点があるが、しかし中国茶には刺激が足りない」と付け加えている。ここでこの作家が言う中国茶とは、中国原産の紅茶ではなく普洱茶や茉莉花茶、あるいは烏龍茶のようなもののことらしい。しかしキーマンとかアール・グレイとかラブサン・スーチョンとか、中国原産の茶葉を使った「英国式」紅茶も数多くあるし、かつて英国が中国の紅茶をしきりに欲しがった結果が阿片戦争である。インド、セイロンに良質な茶葉があることは事実だが、中国産の茶葉でいけない理由はない。「茶」と‘tea’は元来同じ語であり（フランス語の「テ」とかドイツ語の「ティー」とかインドあたりの「チャイ」とか、茶を表わす